第 2013-16 号

恵みと真理のニュース

2013 年 6 月の二次　恵みと真理教会
韓国 京畿道 安養市 萬安区 安養 5 洞 458-5 / ☎82-31-443-3731 / www.gntc.net

［証］ 若い時、主の御言葉を聴き愛し捧げる恵みと楽しみを与えてくださり感謝します。

私の親は神様に礼拝を捧げ主のことを最優先的にします。そんな親の影響で私も子供の時から礼拝と奉仕する生活に慣れていました。しかし、青少年のごろ礼拝を捧げることや奉仕することが恵みと感謝ではなく習慣的になり形式的になりました。大学生になっては世の人々と同じく区別ない生活をしていました。神様が生きていらっしゃることは知識だけで信仰的に赤信号でした。
大学生活をしながら今までの信仰生活対して深く考え、このままではでいけないと思いました。神様の生きていらっしゃることには疑わないが人格的に神様に出会わなく心霊な共通と体験がなかったです。また、神様と親密な関係で成長しない信仰に対して悩み始めました。母を通して神様について聞き知り、信じるようになりましたがこれからは真実に生きていらっしゃる神様を知り出会い信じたい切ない心でした。
学校生活で忙しかったですが神様との関係がもっと深く豊かになるのが急ぎで重要だったので平日礼拝も頑張って参加しました。“わたしを愛する人をわたしも愛し／わたしを捜し求める人はわたしを見いだす。”という御言葉を覚えながら月曜祝福祈り会と金曜徹夜祈り会に行っていつどこでも共にいらっしゃる神様の臨在を体験し意識するように祈りました。霊的に渇いている心で礼拝を捧げるたびにメセージの恵みを求めました。
切ない心になっているとき神様は私に出会ってくださいました。私の人生の中でいつも共にいらしゃってくださいました。世がくれないただ神様の御言葉と聖霊の恵みでくださる慰めと自由と平安を感じるようになりました。とても嬉しくて説明できない感動を受けました。その時から私は信仰が成長し恵み溢れる信仰生活が始まりました。
教会学校の小学部の教師として奉仕を始めました。聖霊様の臨在の中、喜びで奉仕するある日、感謝の祈りの時間に部署のリバイバルと学生のため涙を流しながら切なく祈りをする時いげんの賜物を受けました。くださる恵みに感謝しながら奉仕することに力を入れると私が願っていたいげんの賜物をくださったのです。その後から、礼拝を捧げ奉仕することが世のことよりも楽しくて教会にいる時間が本当に幸せでした。
しかし、私の心でひとつ寂しいことがありました。私は大学生で青年でしたが今まで青年の礼拝と奉仕は参加しなしなかったからです。そうするうちに青年連合会で運営する宣教学校について知るようになりました。神様の導きだと思って恵みで宣教学校に登録して講義を聴きました。宣教学校で習い訓練する過程を通して福音の伝道の重要性と緊迫性を深く悟るようになりました。世界宣教のビジョンも心に抱くようになりました。それして　2009年　インドネシアとフィリピンで海外宣教活動も行って来ました。

次号に続く

［信仰コラム］ 救援(きゅうえん)得(え)ることは易(やさ)しい。しかし難(むずか)しい。

イエスは彼の様子を見て言われた、「財産のある者が神の国にはいるのはなんとむずかしいことであろう。富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい」。(ルカ　18:24~27)

聖書(せいしょ)は、福音(ふくいん)が記録(きろく)された本(ほん)です。福音(ふくいん)とは救援(きゅうえん)の消息(しょうそく)です。救援(きゅうえん)の核心(かくしん)は、罪(つみ)を赦免(しゃめん)されて、永生(えいせい)を得(え)ながら、神(かみ)様(さま)の子供(こども)となって、天国(てんごく)に入(はい)ることをいいます。人(ひと)に最(もっと)も重大(じゅうだい)なことは救援(きゅうえん)得(え)ることです。これを認(みと)めてもいやしてもその事実(じじつ)は変(か)わりません。人(ひと)がこの世(よ)の中(なか)に住(す)んでいる間(あいだ)救援(きゅうえん)を得(え)なければ、悲惨(ひさん)な人(ひと)です。
まず、救援(きゅうえん)を得(え)ることが容易(よういい)という事実(じじつ)について見(み)てみます。
救援(きゅうえん)得(え)る条件(じょうけん)は単純(たんじゅん)です。福音(ふくいん)を信(しん)じることだけです。違(ちが)って言(い)ってイエス・キリストを信(しん)じることで十分(じゅうぶん)です。救援(きゅうえん)得(え)る道(みち)はとても簡単(かんたん)明瞭(めいりょう)だ。″キリストを信(しん)じなさい。″これです。どんな複雑(ふくざつ)な手続(てつづ)きを経(へ)なければならないことがありません。老若(ろうにゃく)男女(なんにょ)、貧富(ひんぷ)貴賤(きせん)の差(さ)、人種(じんしゅ)に差別(さべつ)がありません。お金(かね)、学識(がくしき)、才能(さいのう)、社会(しゃかい)的(てき)地位(ちい)、徳(とく)、善良(ぜんりょう)なことを行(おこ)なった業績(ぎょうせき)が必要(ひつよう)ありません。信(しん)じているのは誰(だれ)でもできます。臨終(りんじゅう)直前(ちょくぜん)にでも信(しん)じることができます。人(ひと)は誰(だれ)でも罪責(ざいせき)の荷物(にもつ)、人生(じんせい)の空(むな)しさと死(し)の不安(ふあん)という荷物(にもつ)を負(お)っています。しかし、宗教(しゅうきょう)意識(いしき)と修練(しゅうれん)が罪(つみ)と人生(じんせい)の無(む)意味(いみ)と死亡(しぼう)の重圧(じゅうあつ)感(かん)で休息(きゅうそく)を得(え)てくれなくます。教育(きょういく)や善行(ぜんこう)もこれを解決(かいけつ)してくれなくます。政治(せいじ)が、事業(じぎょう)家(か)、科学(かがく)者(しゃ)が解決(かいけつ)してくれなくます。神(かみ)が″苦労(くろう)して重(おも)い荷物(にもつ)なった者(もの)たちよみんな私(わたし)のところに来(き)なさい。″しました。神(かみ)様(さま)ともに行(い)くにはどうすればいいですか?
私(わたし)たちを救(すく)うなさろうと死(し)んでいらっしゃったですが死(し)から復活(ふっかつ)したイエスキリストを心(こころ)で信(しん)じて口(くち)で認(みと)めたらいいです。このように救援(きゅうえん)を得(え)ることは実(じつ)に簡単(かんたん)なことです。
次(つぎ)は、救援(きゅうえん)を得(え)ることが極(きわ)めて難(むずか)しいという事実(じじつ)について見(み)てみます。
イエス・キリストを信(しん)じることに決断(けつだん)するものと継続(けいぞく)的(てき)に信頼(しんらい)を強(つよ)く持(も)つことは決(けっ)して易(やさ)しくないです。先(さき)に、捨(す)てなければならないことがあります。自分(じぶん)が持(も)っていることで救援(きゅうえん)を得(え)ようとすることを放棄(ほうき)する必要(ひつよう)があります。それは宗教(しゅうきょう)行為(こうい)、伝統(でんとう)、家門(かもん)、修養(しゅうよう)、教養(きょうよう)、先行(せんこう)などです。頭(あたま)に入(はい)った知識(ちしき)が多(おお)く、学位(がくい)をたくさん持(も)っていたからに福音(ふくいん)に耳(みみ)をふさいでいる人(ひと)が多(おお)いです。世(よ)の中(なか)の地位(ちい)と名声(めいせい)、そして才能(さいのう)が多(おお)いので救(すく)いの真理(しんり)を受(う)けない人(ひと)が多(おお)いです。健康(けんこう)と容姿(ようし)の優(すぐ)れたことのために救援(きゅうえん)の消息(しょうそく)を無視(むし)する人(ひと)もいます。このような所有(しょゆう)を実際(じっさい)にすべて捨(す)てなければならないというのではなく永(えい)生(せい)がその何(なん)よりももっと重要(じゅうよう)だということを知(し)って永生とこんなことを二者(にしゃ)択一(たくいつ)しなければならない場合(ばあい)なら躊躇(ちゅうちょ)なく永生(えいせい)を選択(せんたく)できる者(もの)になる必要(ひつよう)があります。
イエス・キリストを信(しん)じ、他(た)の障害(しょうがい)物(ぶつ)を克服(こくふく)しなければなりません。家族(かぞく)たちの反対(はんたい)を克服(こくふく)しなければなりません。社会(しゃかい)生活(せいかつ)で受(う)ける事(こと)になっている困難(こんなん)や不(ふ)利益(りえき)を甘受(かんじゅ)する必要(ひつよう)があります。信仰(しんこう)生活(せいかつ)に妨害(ぼうがい)されている生活(せいかつ)習慣(しゅうかん)や方式(ほうしき)を変(か)えなければなりません。患難(かんなん)や他(ほか)の信者(しんじゃ)たちとの関係(かんけい)で経験(けいけん)するようになる試験(しけん)を耐(た)えなければいけないです。神(かみ)が救援(きゅうえん)得(え)ることがそんなに生易(なまやさ)しいものがないことを指摘(してき)したことで救援(きゅうえん)得(え)る者(もの)が多(おお)くないことであることを表明(ひょうめい)していて″狭(せま)き門(もん)に入(はい)ることを努(つと)めなさい。″しました。キリスト教(きょう)徒(と)の家庭(かてい)で育(そだ)ったこと、教会(きょうかい)に通(かよ)って宗教(しゅうきょう)活動(かつどう)を行(おこな)ったことが救(すく)いの保証(ほしょう)がされません。イエス・キリストだけが救世(きゅうせい)主(しゅ)のことを信(しん)じなければいけません。。宗教(しゅうきょう)多元(たげん)主義(しゅぎ)や混合(こんごう)主義(しゅぎ)や包容(ほうよう)主義(しゅぎ)信仰(しんこう)の路線(ろせん)に従(したが)うのは大(おお)きな扉(とびら)を、広(ひろ)い道(みち)で行(い)くのです。神(かみ)様(さま)を信(しん)じることより優先(ゆうせん)されることがある人(ひと)にはイエス・キリストを信(しん)じることが非常(ひじょう)に難(むずか)しいことではありません。ラクダが針孔(めど)に入(はい)る前(まえ)より難(むずか)しいです。
皆(みんな)さんは救援(きゅうえん)を得(え)るものよりももっと重大(じゅうだい)で価値(かち)のあることがないという事実(じじつ)を知(し)って、イエスキリストを信(しん)じることに最高(さいこう)の意味(いみ)を持(も)つようになることを願(ねが)います、イエス・キリストを信(しん)じることが少(すこ)しも難(むずか)しくないて無限(むげん)に嬉(うれ)しくて幸(しあわ)せなこととされる聖徒)になるよう願(ねが)います。

「チョヨンモク牧師先生の信仰コラム‘緑の牧場、清い川’本の語り中」

あなたはこんなの信仰がありますか?

恵みと真理教会 **チョヨンモク** 牧師

クリスチャンと言うのは信仰で新しい命を得てまた信仰で生きて行く人々だと言えます.
ヘブル人への手紙,10：３８“わが義人は、信仰によって生きる。もし信仰を捨てるなら、わたしのたましいはこれを喜ばない。”しました.
今日の聖書の本文はクリスチャンにいなければならない信仰が何でその信仰でよる胆大さと平安がいくら大きいかを現わしてくれています.使徒行伝27章と28章は使徒パウロが乗った船がおびただしい風波に会った事実とそんなところで使徒パウロが信仰で対処して行った話を取り上げています.
パウロが宣教師になって傳道活動を始めてからいつのまにか 20余年の歳月が経ちました.
パウロがエルサレムを訪問したがこれが彼の最後のエルサレム訪問になりました.
なぜならばユダヤ人たちがパウロをつかんで聖殿の外に引っ張り出して殺そうと思いました.
あの時ローマ軍隊の千卒長が軍人を導いて来てパウロを救出しました.
ローマの属国で騒擾事態が発生すれば総督や司令官はローマ政府に報告して責任を負わなければならなかったからです.
この事件によってパウロ使徒は獄に閉じこめられることになったし
総督が駐在するカイザリャに移送されました.
ペリクス総督に審問を受けて裁判を受けたが総督がユダヤ人たちを意識したわけでパウロは監獄にずっとなければならなかったです.
2年が経った後新しい総督フエストの前で裁判を受けるようになるとパウロはローマ市民の一人としてローマ皇帝に上訴しました.
パウロは獄の中で“パウロよあなたがエルサレムで私の仕事を証言したことのようにローマでも証言しなければならなかろう.”する神様のお話を聞きました.そしてパウロは他の罪囚たちと一緒に近衛隊の百卒長ユリアスの護送の下にローマに行くようになりました.
彼らの乗った船はカイザリャで出航しました.
航海をするうち‘ユーラクロン’という狂風が吹きつけました.
荒々しい風と波によって船員たちはお手上げになりました.
このまま行っては破船するしかないという危機感を感じた船頭たちが明くる日荷物を海に捨ててしまいました.
三日間になる日には船の器具まで出してしまいました.
その船には船員と商人と軍人と旅行客そして罪囚まで皆 276人の人々が乗っていました.
暴風が続いて日と星が見えないうちに滲む荒々しい風浪に滞って地中海を漂流しました.
すべての人々が何も食べることができずに恐怖と絶望に震えました.
ところでパウロの心霊は平安と胆大さと所望と確信で一杯でした.
パウロは死の恐怖に押さえ付けられて精根がつきた人々の中立って叫びました.
“皆さんよ,お勧めする。元気を出しなさい。船が失われるだけで、あなたがたの中で生命を失うものは、ひとりもいないであろう。昨夜、わたしが仕え、また拝んでいる神からの御使が、わたしのそばに立って言った、『パウロよ、恐れるな。あなたは必ずカイザルの前に立たなければならない。たしかに神は、あなたと同船の者を、ことごとくあなたに賜わっている』だから、皆さん、元気を出しなさい。万事はわたしに告げられたとおりに成って行くと、わたしは、神かけて信じている”(行27:22～25).
使徒パウロがこのように処身することができる理由がすべての人を向けて叫んだ彼の話しに現われています. その核心は三種類です.

第一、私は神様に属したという信仰です.

使徒パウロは“私が属している神様”と言いました. イエスキリストを信じれば得るようになる変化の中に一つが所属の変化です.
ヨハネ1で 4章 4節に “子たちよ。あなたがたは神から出た者であって、彼らにうち勝ったのである。あなたがたのうちにいますのは、世にある者よりも大いなる者なのである。”しました. ここで‘子たち’という呼称は聖徒たちを向けたことで‘彼ら’と言うのはサタンを示します. サタンを勝とうとすれば所属が変わらなければなりません.
イエスキリストの血で罪を洗い受けて聖霊で生まれかわって神様の子になった皆さんは皆神様に属しました. サタンは神様に属した者を害することができないです. 神様が将来サタンを縛り上げて無底坑に投げこむでしょう. それから千年後にはしばらく解いておいてから最後にはわずか硫黄で燃える地獄に投げこむようになります. 人は誰も悪者であるサタンに属しているとかそれとも神様に属しているとかふたつの中に一つです.
中立だと言う人はサタンに属しています.神様に属したという意味はあまりにもおびただしくてすべて形言することができないです.
皆さんが享受する平安と所望の深みは神様に属したという意味を認識する深みに比例するでしょう. 使徒パウロは ピリピ人への手紙で 3章 20節に記録するのを “わたしたちの国籍は天にある。そこから、救主、主イエス・キリストのこられるのを、わたしたちは待ち望んでいる。” しました. 神様に属した人は神様国の市民です. 天国市民です.
神様の威光と保護がよっています. だから神様に属した人はどんな状況でも気落ちするとか恐れるまでもないです. 聖徒の皆さんは困難にあう時に使徒パウロのように“私は神様に属した.”と言ってください. そしていつも所望的で胆大な態度を取ってください.

二番目は、神様を仕えることをすごい自慢と特権で思う信仰です.

使徒パウロは言うのを“私の属したすなわち私の仕える神様” と言いました. 使徒パウロが無神論者と偶像崇拝者たちの前で“私の仕える神様”と音高めて叫んだ理由があります. 使徒パウロはどんな状況でも人々が神様を仕える信仰を持つように導く機会にしました. カイザリャに拘禁されているうちに,総督ペリクスと総督の婦人にイエスキリストを信じる信仰を言いました. またペリクス総督の後任であるベスド総督とアグリバ王が神様を仕えるようパウロは力をつくして福音を伝えました.
また破船されている船の中でも自分が仕える神様に対して言いました. “私は神様を仕える.”言葉よりもっと誇らしくて栄え栄えしいものはないです.

三番目は、神様の言葉をすんごうも疑わない信仰です.

使徒パウロは恐ろしさにおちいって精根がつきた人々を向けて “皆さんよ, 安心しなさい私は私におっしゃったそのままになると神様を信じる.”しました.その頃状況で見る時このような信仰を宣布するということはまことに驚きべきです. 多くの日の間 日と星が見えなかったです. 暴風は止むことができなくて吹いて来て波は船をのむように押しかけています. 荒々しい波に滲む難破の直前になりました. 使徒パウロはこんな地境でも神様がおっしゃった言葉をそのまま信じました. 真の信仰は最悪の場合にも神様の言葉どおりなることを確信するのです. 神様の言葉を完全に信じれば我らの心の中に平安と所望があふれるようになります.私たちは欺くことと偽りが一杯な世の中に住んでいます. 人は偽りされても神様は偽りがないです. 偽りの父であるサタンは人を惑って永遠な地獄で導きます. サタンは人を盗んだり殺して滅ぼさせるために偽りをささやきます. サタンの国は偽りの上に建てられたので崩れるでしょう. しかし神様の国は真実の上に建てられています. 神様の国は永遠無窮します. “イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変ることがない。”(ヘブル13:8). 予言者バルラムは異邦王バルラックを向けて言うのを “神は人のように偽ることはなく、また人の子のように悔いることもない。言ったことで、行わないことがあろうか、語ったことで、しとげないことがあろうか”(民 23:19) しました. ヘブル6章 16節, 17節には “いったい、人間は自分より上のものをさして誓うのであり、そして、その誓いはすべての反対論を封じる保証となるのである。そこで、神は、約束のものを受け継ぐ人々に、ご計画の不変であることを、いっそうはっきり示そうと思われ、誓いによって保証されたのであるしました.
クリスチャンの信仰と言うのは神様の言葉に対する信仰でその言葉のどおりなることを信じる信仰です. 逆境と試練の中でも神様の言葉を固く信じる人は心に平安と余裕を持って生きて行くことができます. 神様のおっしゃったどおり結局は一人も死なないで皆が島に上陸するようになりました.その島の酋長のポプリオの父が赤痢をわずらい、高熱で床についていた パウロが行って祈って手を上げて置きましていやされた. するとその島にいる他の病者たちが来て彼らも治すことを受けました. それによって島に上陸したすべての人々が土人たちから手厚いもてなしと贈り物までもらうようになりました. そうしてあの時から助け船が来る時まで三か月の間パウロの復興の盛会期間になったし災い転じて福となすになりました.
聖徒 皆さん,“人生の道にどんな事が迫って来ても私は神様に属した. 私は神様を仕えるために暮す. 私は神様が私に約束したそのままになると信じる.”という信仰を宣布してください. 神様に属したという信仰,神様を仕えながら暮すことを自慢と特権で思う信仰, 神様がおっしゃったそのままになることを信じる信仰が皆さんにおいていつも所望を持って平安で胆大な心で行うようにお願いします.